

一瞬の美学を追求して

株式会社村瀬煙火

代表取締役社長

村瀬 光正さん

専務取締役

村瀬 功さん

花火師の晴れ舞台といえは、もちろん「花火大会」。岐阜市長良の株式会社村瀬煙火では、大正十二年創業以来、岐阜の夏の風物詩「長良川花火大会」をはじめ、全国各地の名だたる花火大会やイベントを飛び回り、日本の夏の夜空を鮮やかに彩ってきました。

「美しい花火」への思い

村瀬煙火の花火は山県市の専用工場で作られています。三代目であり代表取締役社長を務める光正さんを中心に家族総出で作業にかかり、深夜まで及ぶこともありましたが。そんな風景を次期四代目の専務取締役、功さんは「工場での作業は、夏場はほんとうに暑くて、そこで働く父や先代の姿に、美しいものを作り出す裏方の仕事とは、こんなにも大変な仕事なのだ」と実感しながら育ちました」と、幼少期を思い出します。

功さんは、そんな家業の過酷さを子どもの頃から感じ過ぎてしまったことや、自身が二男であったこともあり、若い頃は後を継ぐという意識は全くなかったといいます。「もちろん学生時代は、夏の繁忙日には手伝ってはいましたが、いわゆる「バイト」の意識で働いていました。父も自分の代で終わりがかな、と思っていたみたいです」と振り返ります。

まいます。花火は火薬をつめるだけ、ただ、開かせるだけ、と考えるなら誰でも作れます。日本中の多くの皆様に喜んでもらえる花火を作るために、一つ一つ『丁寧な作業』をしていくことが美しい花火に繋がる。この想いを私も次世代に必ず繋いでいきます」

花火業界の働き方改革

功さんは跡を継ぐと決めた際、花火業界をこの先も長く存続させていくために「働き方改革」に積極的に取り組もうと決意しました。

「子どもの頃の思い出としても鮮明に思い出すが、夏の過酷な作業ですが、逆に冬の作業時間は少ないというように労働時間の偏りがあることを何とか調整できればと思っていました」

しかし、伝統工芸故に、現代の労働基準のルールに合わず、法律で定められる労働時間の基準が厳しくなったこともあり、年間を通じての作業時間を一定にする調整には、大変苦労しました。

また、二十年ほど前までは花火は全て手作業で打ち上げられていましたが、今ではあらかじめプログラムしておいたコンピューターで打ち上げています。おかげで手作業の時代にあった火傷や事故などのリスク回避ができるようになりました。

そこには父、光正さんからの「花火というものは常に怖いものとして頭に置くこと。どれだけ準備しても絶対に事故が起きないとは言えない」というアドバイスもあり、危険な作業が発生する花火を極力見直していききました。その考えから、手筒花火の生産も止めるという決断に至りました。

100年先も美しい花火を

「コロナ禍において懸念されるのは伝統芸術の存続です。



専務取締役 功さん(左) 代表取締役社長 村瀬光正さん(右)

しかし、転職は訪れました。それは、大学三年生の時。就職を考え始めたことが、改めて家業を見つめ直すきっかけとなりました。「兄が既に別の職に就いていたこともあり、歴史のあるこの稼業をこのまま父親の代で終わらせていいのか、勿体ないのではなにか」と自問するようになり、悩み抜いて出した答えは「継ぐ」ということでした。

そして、大学卒業と同時に家業に入ることとなりました。村瀬煙火の花火づくりで、創業より代々繋いでいる一番の思い、それは「丁寧な花火づくり」です。

「花火は会社ごとに色や作り方が違います。それぞれ秘伝の製法がありますが、いかに「丸く開かせるか」が大事なのです。星の並べ方や職人の熟練の技術によって同じ材料を使っても全然違った出来になります。丸ければ丸いほど美しい花火だと言われますが、うちの花火は真円ではんとうに美しいと自信があります。どんな事柄でもそうだと思いますが、「手を抜こう」と思えばどれだけでも手が抜けてしまいます」

これまでもバブル崩壊や数々の震災などで厳しい時代を乗り越えてきましたが、今が一番大変だと感じています」と、光正さんは語ります。

「花火は自然との闘いです。台風や大雨で中止や延期となることも多いのですが、それを受け入れ、無事大会を終えることが出来たときに、お客様からもらう拍手は花火師冥利につきると思っています」

その上で、功さんにこんなエールを送ります。

「花火の内容や種類はどんどん進化し、常に研究をしなければなりません。コロナ禍で世の中がどのように変化していくのか先が見えない中で、花火師として伝統を守りながら時代に合った芸術を追い求めて『一瞬の美学』を追求し続けてほしいです」

それに応えるように功さんは「長良川花火大会のような大規模花火大会は、コロナが完全に収束するまでは難しいと思っています。サブライズ花火や、小規模な花火大会、人数制限を伴い有料で開催される大規模な花火大会など、これからは花火大会自体が多様化していくと思います。長良川花火大会は県の伝統工芸品にも指定されていますし、無くなってしまうたら、岐阜市民の皆さんが寂しい思いもされると思いますので何か形を変えてでも花火が打ち上げられるといいなと思っています。そして今後一〇〇年先もずっと打ち続けることができれば、と考えています」

光正さん、功さんは岐阜の夜空を、日本中の夜空を華やかに彩る花火大会が、また日常として行われる日が一日も早く来ることを願い、今日も大輪の花火を作り続けます。

株式会社村瀬煙火 所在地：岐阜市福光東3-8-2 TEL.058-231-5020 FAX.058-295-3533